

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」養成講座 第3回講座概要

第2部：座学 巡拝の道・須走の町を知る「須走の成り立ち」

■日時

令和元年 9月 21日 (土) 10時 40分～11時 40分

■場所

富士浅間神社 社務所

■講師

石橋 良弘 東口本宮富士浅間神社 禰宜

■講義概要



1. 神社神道とは？

- －神社＝宗教神道。教えではなく道「神道」。自分自身を高めていくもの。
- －例大祭等の祭典・神事は道ではなく宗教儀礼だが、日本古来の自然崇拝・成長儀礼・祖先崇拝などの上に成り立つもの。キリスト教や仏教等は教祖がいるが、神道には存在しない。教義・経典はなく、古事記・日本書紀などの記紀神話も歴史書の扱い。「〇〇した方が良い」という寛容さが神社の特徴。
- －江戸時代は神社ごとにお祭りがあり、式次第や行事の内容も微妙に異なっていた。明治に入り、なぜ欧米の国民が団結するのかの要因に柱となる宗教キリスト教があることを見て、キリスト教に代わるものとして日本では仏教ではなく神道を当てはめた。
- －森羅万象自然の感謝する信仰を日本の宗教的なものとした。これにより、全国の神社の二礼二拍手一礼等の参拝作法や祭典、伊勢神宮中心・皇統護持などの基本方針・理念が統一された。
- －この際、伊勢神宮、出雲大社のどちらが中心となるか意見が二分したが、明治天皇のご采配により伊勢神宮となった。その時に神仏判然令(廃仏毀釈)が行われた。富士講は仏教色が強かったが神道化され天理教などの他の民間信仰天理教なども神道化された。
- －戦後、GHQが大日本帝国の頑張は日本の何に起因するのかを皇室、神社を中心とした神道にあるとし、神道指令で神社を壊そうとした。受け入れるわけにはいかないので神社界が協力をし、最終的に統廃合して、「神社本庁」が誕生した。
- －戦前戦中「国家神道」と呼ばれるが、これは戦後に使われ始めたもの。国家神道の時代に政府の事業として、新嘗祭(収穫祈年祭)は「勤労感謝の日」となり、祝祭日に変えられた。祭日であり、祝日ではない。昔お祭りをしていた日にちが祭日。

2. 神社神道の中心

- －自然崇拝(対象は天神地祇 八百萬神)。山、富士山、川など自然の神様に対しての信仰が神道の中心。富士浅間神社は富士山の噴火を鎮めるための神社。木花咲耶姫命をお祀りしている。
- －祖先崇拝(対象がご先祖様)。護国・靖国神社など人間の霊をお祀りする。神式の葬式は昔から神社関係者だけだったが、明治には一般的になった。神葬祭で亡くなった方の魂を霊璽(位牌)に遷し魂が宿る。その霊璽により、子孫が守られることに感謝し、家庭内で霊璽をお祀りする。
- －成長儀礼。安産・初宮・七五三・厄払・還暦など人生の節目に神様に成長を報告し、お守りいただく。室町から江戸時代の神仏習合の時代にかけて、泰平な時代が続いていたので、文化的なものを

行ったと考えられている。

3. 富士浅間神社の神様

ー東口本宮富士浅間神社の主祭神は木花咲耶姫命、相殿伸：大己貴命、彦火出出見命

・木花咲耶姫命は、富士山の噴火を治める神様。関東を中心に富士山の神様として位置付けられている。九州ではお酒の神様。

・大己貴命は、出雲大社の神様、大国主命の若いころ別名。

・彦火出出見命は木花咲耶姫命の子。「山幸彦と海幸彦」の神話の山幸彦。

ー富士山登山道周辺の浅間神社では、お祀りしている神様の組み合わせが微妙に違う。

ー大己貴命は、国土を開拓する神様。噴火で荒廃した町を復興するために祀られ、彦火出出見命は山合いの農業、産業を守護する。復興した町をますます発展するために祀られたのではないか。

ー戦前、郷社(地域の人々が管理する)だったが、となり、県が管理する県社だった。神主がお祀りで使う道具「笏(しゃく)」に静岡県駿東郡須走村・高根村組合役場と書かれているものがある。

4. 富士浅間神社・須走口の特徴

ー地域の守り神である氏神様であり、富士講・交通の要衝(鎌倉往還)に関する宿場町、道を守護する崇敬神社という2つの面があるのが特徴。

ー地域だけでなく関東方面からの信仰を待つのが特徴。氏神様として須走を富士山の噴火からお守りし、駿河や甲斐を結ぶ交通と物流の要衝である須走を歩き交う人々の守り神。

ー弘法大師や富士講などの修験に利用されたと伝えられている。弘法大師が富士山周辺で修行したははっきりしていないが、江戸時代にこの神社を「弘法寺浅間宮」と呼んでいた時代もあった。物流の拠点なので、馬車鉄道など新しい技術、モータリゼーションが進むなど、信仰だけではなく文化の面でも重要な場所であった。

ー創建時代は807年(大同2年)に最初の祠が造られたと伝わる。平成19年に創建1200年の節目を迎えた。

ー鎌倉往還の宿場町で旅館が多く、富士講のお世話をする御師の家が多い。御師以外に民間の方も御師の家の手伝いや自分の家に招き入れていたという記録が残っている。

ー登山道には富士山本宮浅間大社、北口本宮富士浅間神社などがあるが、大きな違いは須走浅間神社が現在も登山道にある小さな神社をお祀りしている。現5合目古御嶽神社、一緒に御室浅間神社、雲霧神社、6合目の山小屋「瀬戸館」の脇にある小さい洞窟を神様に見立てたる胎内神社、9合目の明治に迎薬師堂から変わった迎久須志之神社。野中神社、大日如来が安置されていた。太陽の神様・天照大神がお祀りされている。

ー明治期の廃仏毀釈に伴い葬儀も神式となった。当時は、神社の経済的格差をなくすため格が高い神社は神葬祭が禁止されていた。小規模神社は、お葬式をご奉仕して収入を得る。須走地区で葬式を取り仕切ったのは神道扶桑教(富士講一派)と伝えられている。神道扶桑教の東口教会所が宮上駐車場の向かいにあったと言われている。

ー登山道は北から登って東に下りる、というのが昔からのならわし。東口と北口はセット。北から登って富士宮に下りるのはどうか?頂上から見ると、富士山を分断してしまう形になる。「富士山を割る」と表現し縁起が悪い。

5. 境内の特徴

ー社殿、神門、富士塚の狛犬、信じげの滝、富士講石碑群、根上がりモミの木・縁結びの木、ハルニレ、オオエゾザクラ、火山灰の丘、社殿脇や社務所前の大杉がある。

6. 資料説明

- 先代の宮司小松家が「富士山 東口御師 小松坊善太夫」と書かれた札を登山者に配布していた。
- 「富士山御祈祷札 東口御師 小申学十大夫」と書かれた封筒。中身は、「奉請木花咲耶姫命 大己貴命 彦火出出見命」と書いてあるお札。この三方が書かれているという事で、幕末～明治以降のものだと考えられる。江戸時代の頃は「大山津見神」が祀られていたという記録がある。神様がどこで変わったのかは不明。

7. 参拝の作法(順番は一例)について

- ①一礼して鳥居をくぐる ②参道は端を歩く ③手水舎で手と口を清める ④拝殿前でお参りする ⑤本殿参拝後に御朱印をいただく ⑥摂社・末社にもごあいさつ
- 神様に対して手を合わせる事が重要。順番は臨機応変に。
- ご本殿(肝になる施設)と合わせて、右側の社護神社・恵比寿大国社にも手を合わせてほしい。昔、地域の人が意図を持って神様を呼んだので、手を合わせてほしい。
- 鈴を鳴らすのは①呼び鈴、お清めの意味で鈴を鳴らす ②お賽銭でお供え ③二礼二拍手 ④一礼
※新嘗祭の時もこの順番でやっている。

8. 御朱印や神社疑問への Q&A

- 遠方にある神社の御朱印が欲しい場合、郵送有無を確認する。しかし、郵送ではお参りをしないので、できれば自分の脚でお参りをしてほしい。神社によっては、遥拝をして頂ければ…という所もあるが本来の趣旨から外れる。
- お参りに来たが神職が不在で御朱印がいただけない時は日を改める。参拝者の多い神社では、あらかじめ半紙に書いたものやコピーが用意されている。ご利益がないわけではない。御朱印は参拝をしたという記録、神様に近づいたという証拠であるため、お守りとは少し意味合いが違う。
- 富士山のまわりには浅間大社、北口、河口湖、東口、須山の5つあり、一日で全部回れる。
- 須走口は東向きに山小屋、神社があるので、登山道のどこからでも来光が見える。ご来光に近い登山口というのが須走口の特徴である。

9. 質疑応答

- Q. 参拝の仕方をお願いごとをするのはどのタイミングは?
A. 神社正面に来たら、軽く一礼→2礼→2拍手→お願い事をする→深く礼→会釈
- Q. どこから来た、名前・住所を名乗るほうがいいのか?
A. 厄払いの祈祷の時、住所・生年月日・氏名を伝えるので、自分の住所を伝えるのは丁寧である。お願い事の念を押したい時にはいいかもしれない。
- Q. 報告をするのはいつ?
A. 神社のお祭りごととは対になる。新穀感謝祭と一緒に2月に祈年祭をする。厄払い、七五三などお参りをしたら感謝を伝えるのがセット。感謝を伝えるのは自分のタイミングで OK。初詣の時でも大丈夫。